

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科における研修を終えて

島根大学消化器総合外科

中村 光佑

この度、日本臨床外科学会による若手外科医対象の国内外科研修に応募し、東京大学医学部附属病院肝胆膵外科・人工臓器移植外科で2024年9月30日から10月13日までの2週間の間、研修させて頂きました。私は医師8年目であり、当科肝胆膵グループに所属し、修練を行っております。現在、島根大学においても様々な肝胆膵外科手術を行っており、さらに今年度中を目標に生体肝移植の導入を進めているところです。県内の研修のみならず、high volume center・他施設における肝胆膵外科手術、周術期管理について学びたいという思いに加え、生体肝移植の導入に際し、国内有数の症例数を誇る施設の肝移植見学を行いたいと考えておりました。現在、国内でトップレベルの症例数を誇る東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科で是非学びたいと思い、日本臨床外科学会での国内外科研修に応募し、研修の機会を頂きました。

肝胆膵外科手術については、開腹～腹腔鏡～ロボット手術を見学させて頂きました。火・木曜日の術前カンファレンスにて慎重な手術適応についての議論が行われており、安全な手術成績に繋がっていると感じました。また、若手の先生方から英語の術前プレゼンテーションがあり、日常的に学会活動の訓練もなされている印象でした。ホモグラフィトを用いた静脈再建を伴う肝切除の見学も行い、今までに経験のない刺激の多い時間となりました。また、河口先生からロボット手術における術中・術後の取り組み（体位、使用物品、術後管理等）について教えて頂き、低侵襲手術時代の考え方、取り組みについて考える機会を頂きました。

肝移植に関しては2週間という短い研修期間でしたが、生体肝移植2例、脳死肝移植2例の見学を行うことができました。当院ではこれからの領域であり、術前管理、手術適応、手術の流れ、術後管理について勉強させて頂きました。移植内科医による術前状態管理の重要性も感じました。また、東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科の朝は早く、午前7時から赤松先生による移植患者の回診があり、担当チームの先生方は6時半頃からエコーによる血流評価を行っておられました。また、通常で血液検査1日3回、エコーは1日2回（7時-15時）、1～2週間ICU病棟にて救急科と連携しながら厳重な管理が行われており、データのトレンドや出血、免疫抑制剤の血中濃度の推移によってはエコー、CT撮影、IVR、緊急手術など迅速な対応が行われていることで安全性が担保されている印象でした。また、移植手術日でない日の夕方に移植カンファレンスがあり、全移植患者の経過、変化のある患者がいれば経過検討を行い、その後移植回診が行われていました。生体肝移植における安全なドナー手術、静脈形成に加え、レシピエント手術の全肝摘出～Put in～肝静脈再建～動脈再建（形成外科と合同）～門脈再建～胆管再建～ドレーン留置、経胃的な栄養チューブ挿入、閉創と非常に定型化されている印象であり、7～8時間程度で移植手術が終了するという手術時間が短いことも非常に驚いた点でした。経過によっては非常に過酷な経過となることもある上、関わるスタッフに多くの人数を要するという問題点はありますが、移植でしか助けることができない肝不全などの病態に対し、熱心な気持ちで取り組む先生方の様子にはとても感銘を受けました。

他施設の臨床における心持ちや手術手技、術後管理に触れることができたのは、今後の臨床へ非常に役立つ経験となりました。また、東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科での研修において、スタッフ

の先生方や留学で来日されていた上海の海外外科医とも繋がることのできたのも、今後の外科医としての糧となると感じており、大変嬉しく思います。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えて頂きました日本臨床外科学会の万代恭嗣会長、国内外科研修委員会の高山忠利委員長、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。また、この度の研修をお引き受け頂きました東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科の長谷川潔教授、赤松延久准教授、河口義邦准教授、チームリーダーとしてご指導を賜りました市田晃彦講師、診療案内を行って頂いた佐々木直迪先生、医局の先生方に深謝申し上げます。今回、研修にあたり推薦を頂きました当科の日高教授、研修に送り出して頂いた当医局の先生方にもこの場を借りて感謝申し上げます。

